

## チャレンジ！野菜づくり 次年度に向けた土作りについて



本格的な冬を迎え、家庭菜園は越冬野菜だけとなり、冬の休閑期に入り、空き畑が多くなります。この機会に、しっかりと土作りし、次年度に備えましょう。

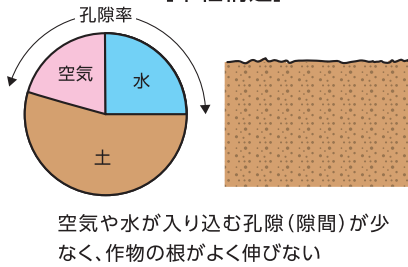
野菜の根が健全に伸びるためには、①水はけと通気性が良いこと、②水持ち（保水力）が良いことが重要な条件となります。

土には、細粒の粘土と粗粒の砂の割合が異なる単粒構造（図1）と団粒構造（図2）があり、団粒構造にするると孔隙率（※1）が高く、空気や水を適度に含み根がよく伸びますが、その状態も数年間野菜を作り続けると、次第に痩せて単粒構造となり、根があまり伸びなくなってしまう。

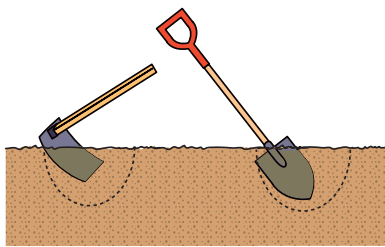
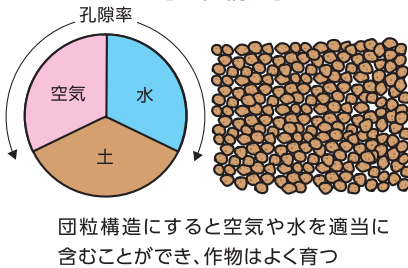
土を団粒構造にするのには、良い粗大有機物の堆肥や緑肥、土壌改良剤などを十分に施し深く耕すことが必要です。

根が深く広く張るためには深層まで条件を整えることが大切ですが、その目安として、直径8〜9mmの棒を畑土に差したとき、あまり力を加えずに入る作土層が20cm以上あることです。カいっばいに差

（図1） [単粒構造]



（図2） [団粒構造]



1〜2年に1回ぐらいは30cm以上深く耕す

し込んで測る有効土層が60cm以上あれば申し分ありません。一般にはこれでも不十分なことも多いですが、深耕することによりここまで改善することができます。

畑起こし、粗大有機物を入れる時期は寒冷の冬が一番です。それは他の作業が暇で、畑が空いているだけではなく、掘り起こした下層の土を上面に出し、厳しい寒気にさらし風化させることにより、物理性が改善され、病原菌や害虫、雑草の種子を死滅、軽減する効果が大きく発揮されるからです。

作業の手順は、前作の残りかすや病害虫の被害株、残根などをき

れいに取り除き、堆肥などの粗大有機物を畑全面にばらまいてから耕します。60cm以上も深耕する場合には先に畑起こししてから、次の耕うん時に粗大有機物を施すのが良法です。

耕した畑土はなるべく表面に凹凸があるままにしておき、寒気に凹める面を大きくします。

土壌の酸性度も冬の間に調べ、pH6.0〜6.5程度に調整しておくことが大切です。酸性を改良する消石灰の施用量は、砂質あるいは腐植の少ない土壌では少なく、黒ぼく土では多くを要するので、施用量を誤らないよう注意しましょう。毎年むやみに与え過ぎると弊害を生じる恐れがあります。

※1…土中の隙間の体積と土全体の体積との比

## 肥料・農薬のご紹介

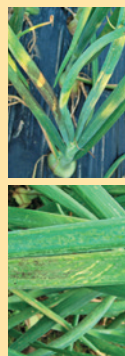
たまねぎのべと病に

## ベトファイター

顆粒水和剤



たまねぎ栽培で注意するべきはべと病です。べと病は、予防が大切です。定期的な防除を心がけましょう！



特に天気の悪い日が続くときは要注意！毎年、べと病・疫病に悩まされている方はぜひ一度、お試しください。

### 主な特徴

- ① 長い効き目と高い予防効果で、持続的にべと病の発病を抑えます。
  - ② 病気の出始めに散布しても治療的な効果を発揮し、進行を抑えます。
  - ③ 優れた浸達・移行性があり、散布ムラに強い。
- 予防効果だけでなく、発生初期段階での治療効果も持ちあわせているため、便利な農薬です。使用される際は、展着剤を合わせて使うと効果が安定します。登録内容等をご確認の上、ご使用ください。